

生活語彙論の方法

室山敏昭

一 言語内的うつわと言語外的現実

現代は、人間学が新しく復興しつつある時代だと言われる。また、総合の時代、コラージュの時代とも言われている。特定の対象と特定の方法との固定的な結びつきに対する疑問が生まれ、人文・社会科学そのものの普遍的原理のようなものが追求されるようになってきた。この普遍的原理とは、一方では、あらゆる学問領域に共通のものとして存在すると同時に、他方、個々の対象領域においては、その個別性・具体性のうちに、それが実現されるという原理である。たとえば、「生活学」といった学問が提唱され、その学的体系の構築が真剣に論議されているという事実などに、その端的な一例を見ることが出来る。

言語学も、その例にもれず、人間実在の言語学が叫ばれ、言語と人間との関わり、言語と言語外現実との関わりが、多くの研究者の関心をひくところとなってきている。社会言語学の興隆や、言語人類学の著しい進展などが、そのことをよく示していると言ってよからう。

人間と言語と外界との関係については、すでに早く、ドイツの言語学者ヴァイスゲルバーが独自の論を展開し、また、アメリカの文

化人類学者ウォーフも、ヴァイスゲルバーとは全く関係なく、ほぼ同じような視点にたどりついた。ヴァイスゲルバーの考えを、すこし長くなるが、田中克彦氏の『言語学の思想』（一九七五、NHKブックス）から引用しよう。「外界は言語を通してはじめて秩序づけられて人間に把握される。外界はあたかも夜空に浮かぶ満天の星のようなものであって、目に入ってくるのは雑然と散らばった一つ一つの光る点でしかない。だが星々の間に人間はある解釈をほどこして、大熊座とかオリオンとかの単位を設ける。この過程は発見というよりは創造と呼んだ方がふさわしい。星じたいには、それが熊や獵師にならなければならないという必然性は全くないからである。しかし、ことばがそれに名づけを行ったとたん、夜空に熊や獵師が現われる。このことがよく物語っているように、ことばはあらかじめ現実の中に示された分類に対して貼りつけられたレッテルでもなければ、人間の意識そのものでもない。つまり、ことばは、現実、客観的世界と人間との間に立ちはだかつて、独自の世界を作り出している。」（二五一頁）そして、ヴァイスゲルバーは、このような言語の独自の世界を、「中間世界」と呼んだ。

これを、言語に即して言うならば、世界を捉えるのは人間ではなく、ことばだということになる。ヴァイスゲルバーのこのような考

え方をつきつめていくと、結局、「人間がことばを作るのではなく、ことばが人間を作るのだ」と断言したフイヒテの言語決定説にまでたどりつくことになる。ここまでくると、やはり、いささかいきすぎと言ふべきで、本来、思考にしても心理にしても、その本質は、内的に言語を超えていると考えられ、言語では捉えきれない剰余が、そこには常に存しているように思われる。それは、きわめて当然のこと、我々の身の回りの現実、あまりにも雑多で、複雑で、しかも、時々刻々変化するものである。それらをすべて、言語化（現実のものや事態に言語のラベルを貼り、明確に概念化すること）し、言語によって分類することは不可能である。どこかで区切り、範疇化しなければ、無限にことばをふやしていかなければならないことになる。人間の記憶の可能容量との相関で、どこかで一線を引く、言語化する部分と切り捨てる部分とを分けなければならぬこととなる。^(注3)これによって、現実世界には、言語化された世界と非言語化の世界とが併存することになる。一例を挙げると、鳥取県の中部地方から東部地方の漁業社会に「タテギラ」という語が認められる。沖合から浜に向かって直線的に「シヨメ」（潮境のこと、シオメ・シヨメとも言う。瀬戸内海域では、シオメ・シヨメ・シオサエ・シオゼ・スジ・アタリメなどの言いかたが聞かれる）が走っている場合を「タテギラ」と言う。「シヨメ」は、本潮と逆潮との境目に認められるものである。「タテギラ」が認められるのは、月にわずか一、二度のことであるが、この現象に対して、「タテギラ」という言語ラベルを貼りつけているのである。ところが、現象としてはよく認められる、浜に平行に走っている「シヨメ」を表現することば（期待される語形は「ヨコギラ」であるが）は、どの漁業社会

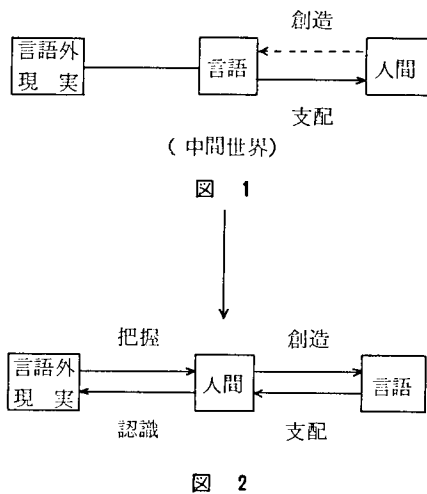
にも認められないのである。

しかしながら、言語が、人間の思考や精神の深い部分と離れがたく結びついていることは確かな事実であり、したがって、言語の体系的特色に即して、国民性を云々したり、人間の意識や認識の構造を解明することは可能であり、そのような試みも、過去においていろいろとなされてきた。^(注4)ヴァイスゲルバーやウォーフの考え方は、いずれも、人間が言語という色眼鏡によって現実を見ており、つねに、言語によって規制されるという立場に立つものである。ここでは、人間は、言語に対して、受身的存在として位置づけられることになる。このような、人間を含めて文化がいかに言語に依存しているか、また、文化がいかに言語と相似の存在であるかという見方は、逆に、一方では、言語構造が、言語外の要素から強い影響を受け、言語外の構造に大きく依存しているという見方も成り立ちうる。^(注5)ここにおいては、文化や生活現実が言語に先行し、人間も言語に対して主体的に振るまうことになる。

このどちらの見方も、時間の流れを全く無視して、ある一時点で横に切り取るならば、ともに正しいと言わなければならない。しかし、現実の言語活動や言語の歴史を直視するならば、どちらか一方の見方で言語と人間、言語と言語外現実との関係を合理的に解釈することは、たちまちにして困難になるであろう。人間が、言語によって一方的に支配されるのであれば、なぜ、言語は変化するのか、言語の変化の芽は、個人個人の日々の言語活動の主體的な営みのこの一瞬、その一瞬に蔽われているのではないのか。ときには、明治維新の場合のように、外来語の輸入、大量の漢語の造語、あるいは共通語の制定など、一国の文化の新生と政治目的のために、きわめて意図的

なことの創造、改変も行われることがあるのである。^(注)しかしながら、また一方では、次のような事実も確かに存する。車の運転ができなくて、そのため車の名前を全く興味がなかったのが、運転を覚えていろいろな車の名前を知ったとたん、今まで全部同じに見えていた車が、急に正確に見分けられるようになるとか、植物の名前を覚えたとたんに、森の中を歩いていても、木や草を正しく見分けることができ、細かなところまで区別がつくようになるといった事實は、日ごろよく経験することである。すなわち、ことばによるイメージの定着であり、象徴性の固定である。そうなると、今度は、イメージの方がひとり歩きを始め、それに、人間が引きずられていくというふうになる。

要するに、この二つの見方は、ともに、一面の真理を有しているのであって、ただ、そのどちらかの見方でもって、「言語・人間・言語外現実」の三者の相互関係を全的に律しきろうとすると、いろいろの点で無理が生ずるように思われる。筆者は、言語と文化、とくに言語と生活現実との関係を考えるとき、この二つの見方はどうしても統合する必要があると考える。両者を、対立の関係から統合の関係へと移行させないかぎり、つねに、なにほどの矛盾と剰余とを蔵したままとなるであろう。すなわち、図1に示した関係を、図2に示すような関係へと置きかえる必要がある。



このことは、たとえば、次のような事実によって、理解することができるであろう。共通語の世界には、「波」の部位を表わす語に「波頭」と「波間」という二語があり、これが、対義語として二項対立の関係を形成している。二つの部位に注目し、それ以外の部分を捨象しているのである。そして、二語しかないために、「波」をこの二つの部位にしか区別できないということになる。ところが、鳥取県下の漁業社会では、「波」を、「ゼツチョー」(絶頂、波頭のこと)「ハラ」(腹、波頭と波間との中間部位)「タニマ・ナラク」(谷間・奈落、波間のこと)の三つの部位に分けて捉えている。「ハラ」という語を新しく生成することによって、共通語に生きる

人びとは全く異なる語彙体系を形成し、また、それに支配されていることになる。なぜ、「ハラ」という語を造語して、この部位を正しく認識し分けようとするかという点と、「アナジ」(北西風)などの強風が突然吹き出して海が荒れても、波の腹を伝って小舟を操ると、無事、港まで帰り着けるからである。ここには、きわめて重い生活の事実が存する。「波」の部位を表わす三語が、いずれも、メタファーによって統一されている点も、注目される。「波」について、もう一例挙げる。共通語では、「大波」の対義語は「さざ波」で、語形の上から期待される「小波」という語は存しない。しかも、「さざ波」という語は、普通の話しことばではなく、文学用語と呼んでよい性格の語である。したがって、「大波」と「さざ波」は、厳密には、対義関係を形成しえず、

大波 ————— (話しことば)

さざ波 (文学用語)

のように、相互の対義関係を形成する語を欠く二語の併存と解すべきであり、いわゆる欠如的対立の一つの事例である。これに対して、漁業社会では、「大波」の対義語として「小波」という語を用いており、さらに、京都府与謝郡伊根町の漁業集落には、「チューミ」(中波)という語までが認められ、「オー——チュー——コ」の三項対立の関係を形成しているのである。また、同じ伊根町の漁業集落では、「オーナミ」を「ヌタ」とも言い、それを、風位と関係づけて、「オキヌタ」(北から来る大波)、「アイヌタ」(東から来る大波)、「アラシヌタ」(南から来る大波)、「イセチヌタ」(南東から来る大波)、「ニシヌタ」(西から来る大波)の五つに区分し、それぞれ呼び分けているのである。^(注7)なぜ、このような細分化が認められるか

というと、すでに早く、藤原与一先生が「方言研究法」において示唆していられるように、すべて、生活の必要性のなせるわざというほかはない。

二 雪の二次的語彙素の意味体系と雪の認識

筆者は、藤原与一先生の御教示に従って、いわゆる「方言語彙」を比較的早い時期から、「生活語彙」と呼んできた。従来、方言語彙は、それ自身、言語外現実から切り離された自足の体系(内的に完結している体系)と考えられることが多く、しかも、方言という語の概念に強く引かれて、研究の中心が、どうしても地域差の解明という点に置かれることが多かったように思われる。しかしながら、方言語彙は、それ自身、内的に完結した体系を示しているように見えても、実は、どの地域にあっても、その地域独自の生活現実の反映を、かなり強く見せているものである。したがって、生活現実との関わりを切り捨てることは、方言語彙にあっては不可能だと考えられる。降雪量の非常に多い地域と極端に少ない地域との雪に関する語彙の相違、あるいは、漁業社会の風の語彙と農業社会の風の語彙との相違を考えただけで、このことは明らかであろう。

たとえば、天野義広氏が、日本でも有数の豪雪地帯である福井県勝山市で、雪の語彙について詳しい調査を行い、『フィールドの歩み』第九号に、その体系的記述を発表していられる。^(注8)その中に、「雪」という一次的語彙素を後部要素とする二次的語彙素が、全部で一九語認められる。同氏は、この一九語について、詳しい意味記述を行っているが、意味体系を掃納し、それに基づいて、当地の人びとが雪をどのように認識し分けており、どのような点にとくに強い関心

を寄せているかについては、分析しておられない。そこで、天野氏の意味記述に基づいて、以下に、語彙分析を行ってみることにする。

まず、「雪」の二次的語彙素である一九語を、五十音順に列挙する。

- ①オモユキ(重雪、牡丹雪の異称)、②カタユキ(固い雪)、③カルユキ(軽雪、粉雪の異称)、コンカユキ(粉雪)、シミユキ(氷のように固く凍った雪)、⑥ジャリユキ(固くてざらざらした雪)、⑦シンユキ(新雪、降りたての新しい雪)、⑧フワユキ(綿雪)、⑨ベタユキ(水気の多い雪)、⑩ベトユキ(水気の多い雪)、⑪ボタ(牡丹雪)、⑫ボタモチ(牡丹雪)、⑬ボタモチユキ(牡丹雪)、⑭ホヤユキ(降りたての新しい雪)、ミズユキ(水雪、みぞれ)、⑯ミゾユキ(みぞれ)、⑰ヤコユキ(やわらかい雪)、⑱ワカユキ(若雪、降りたての新しい雪)、⑲ワタユキ(綿雪)

これらの二次的語彙素は、まず、「現に降りつつある雪」を指示するか、「すでに降り積もっている雪」を指示するかによって大きく二分され、それぞれの内部が、次に示すような意義特徴の対立項の諸関係によって、相互に弁別されていると考えられる。

1. 現に降りつつある雪を指示するもの

- ①重い(オモユキ) ↑ ↓ 軽い(カルユキ・フワユキ・ワタユキ)
- ②大きい(ボタモチユキ・ボタモチ・ボタ・ワタユキ) ↑ ↓ 小さい(コンカユキ)

- ③水気が多い(ミズユキ・ミゾユキ・ベタユキ・ベトユキ) ↑ ↓ 水気が少ない(コンカユキ)

2. すでに降り積もっている雪を指示するもの

- ①新しい・降ってからあまり時間が経過していない(シンユキ・ワカユキ・ホヤユキ) ↑ ↓ 古い・降ってからかなり時間が経過している(カタユキ・シミユキ)

過している(シミユキ・ジャリユキ)

- ②やわらかい(ヤコユキ) ↑ ↓ 固い(カタユキ・シミユキ・ジャリユキ)

1の「重い」「大きい」「水気が多い」には、それぞれ共通の特徴が認められ、「軽い」「小さい」「水気が少ない」には、前者に對立する共通の特徴が認められる。1に属する二次的語彙素の意味的關係をわかりやすく図示すると、図3のようになる。

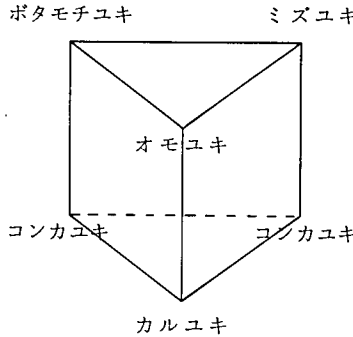


図 3

この「雪」の三角柱図の上面の「重い」「大きい」「水気が多い」という意義特徴を有する語彙素は全部で九語であり、底面の「軽い」「小さい」「水気が少ない」という意義特徴を有する語彙素は全部で三語である。これによって、土地の人々は、水気を多く含む、大きくて目立ちやすい雪の状態に、より強い関心を寄せていることが理解される。そして、このことは、おそらく、福井県勝山市に降る雪の性質の特色を、かなりよく反映していると解されるのである。し

かも、「雪」の三角柱図の上面に属する語彙系には、「ボタモチユキ」に対する「ボタモチ・ボタ」とか、「ミズユキ・ミソユキ」「ベタユキ・ペトユキ」のような、いろいろの省略形や音訛形が認められる。これは、福井県勝山市において、これらの語彙系が多用されることの具体的な反映ではないかと解される。

これらの「雪」の二次的語彙系の意味体系を、共通語のそれと比較すると、最も大きな相違は、共通語が、「雨」「みぞれ」「雪」と三つの範疇に弁別しているものを、勝山市では、「みぞれ」を「ミズユキ」と表現して雪の一種と捉えており、「雨」と「雪」の二つの範疇にしか弁別していないという事実である。福井県勝山市では、「みぞれ」が「みぞれ」の状態のまま終ることはなく、夕方になると、きままって「ボタモチユキ」になるため、「みぞれ」と「雪」とを連続的な自然現象として捉えているのに対して、共通語では、「みぞれ」と「雪」とを不連続のものとして認識しているために、このような意味体系の著しい相違が認められることになるのではないかと考えられる。もう一つの相違点は、共通語で、「カルイ ユキ」「オモイ ユキ」「ヤワラカイ ユキ」「カタイ ユキ」と、二語で言い表わしているところを、当地では、「カルユキ」「オモユキ」「ヤコユキ」「カタユキ」と一語で表現している事実である。二語で言い表わすか一語で言い表わすかは、きわめて大きな相違であって、二語で言い表わすのは、「雪」をそのような状態として捉えていることを意味し、一語で言い表わしているのは、「雪」をそのような状態にあるものとして、明確に概念化して捉えていることを意味している。「カルイ ユキ」「ヤワラカイ ユキ」は、

「ユキガ カルイ」「ユキガ ヤワラカイ」という主述構造による認識を根底に置くものであって、一語によって表現される、ものとしての概念の表示とは、きわめてへだたりの大きいものであると言わなければならぬ。ここには、「状態」と「もの」との著しい対立が認められる。すなわち、福井県勝山市の人びとは、「雪」というものを、共通語に生きる人びとは違って、多くの角度から見分けているわけである。このように、自然環境の独自の状況に対して、土地の人びとは独自の認識を行い、語彙化という行為を通して、特徴的な語彙体系を構築し、それに基づいて、多様な知識を共有のものとしているわけである。

三 風の語彙と漁業生活

雪の語彙に限らず、生活語彙のさまざまな意味分野において、先に指摘したような事実は、一般的に認められることである。こういうわけで、言語外の現実が、その土地に生きる人びとの興味や関心や生活の必要性という視点を介して、生活語彙の体系に反映するということは、すでに仮説の域を超えて、いまや原理と呼ぶことができると思う。しかしながら、それでは生活語彙の体系がどのようなカテゴリーによって形成されており、そのカテゴリーのどのレベルが生活差や地域差を超え、どのレベルが生活差という言語外現実の典型的な特性を反映しやすいかという微視的分析や、それを行うための方法的プロセスの確立は、これから明らかにされなければならない課題として、我々の前に、大きく横たわっている。そこで、以下には、漁業語彙のうちのいくつかの意味分野について、検討を

加えてみることにする。

自然環境に関する語彙は、それぞれの地域の気候・風土などの特色を、人びとのそれらの状況に対する関心の寄せ方を介して、体系的に反映すると解することができる。しかしながら、人びとの関心は、全体にまんべんなく及ぶものではなく、おのずから重点的である。したがって、体系的に反映すると言っても、それは、決して、均等に全体に反映するわけではない。言語と人間と言語外現実を支える論理は、科学的論理ではなく生活的論理だと言われるゆえんは、その点に存すると考えられる。

ところで、生業語彙は、自然環境に関する語彙よりも、事態はさらに複雑であると考えられる。なぜならば、生業語彙には、自分達の生活にとつての実際の効用という、実に面倒な問題が入りこんでくるからである。

まず、最初に、鳥取県気高郡気高町姫路方言の東風を指示する語彙を取り上げて、語彙分析を行ってみることにする。同方言には、次の一二語が認められる。「ヒガシカジェ・ヒガシ・ヒガシケ・コチカジェ・コチ・コチケ・ハルゴチ・アイノカジェ・アイケ・ヨアイ・ジアイ・オーアイ」である。

これらは、まず、語形の相違によって、

1. ヒガシカジェ・ヒガシ・ヒガシケ

2. コチカジェ・コチ・コチケ・ハルゴチ

3. アイノカジェ・アイケ・ヨアイ・ジアイ・オーアイ

の三類に大きく分類される。これが、さらに、一次的語彙素と二次的語彙素とに分別される(ただし、「カジェ」「ノカジェ」は総称であり、ここで問題としている「ヒガシ」「コチ」「アイ」などよ

りもはるかに包括的であって、この有無が有意の弁別の特徴とはなれないので、除いて考えることにする。したがって、「ヒガシカジェ」「コチカジェ」「アイノカジェ」は、すべて一次的語彙素として処理する)。

1. ヒガシ・ヒガシカジェ(一次的語彙素)、ヒガシケ(二次的語彙素)

2. コチ・コチカジェ(一次的語彙素)、コチケ・ハルゴチ(二次的語彙素)

3. アイノカジェ(一次的語彙素)、アイケ・ヨアイ・ジアイ・オーアイ(二次的語彙素)

この三類の意味的関係を解明するためには、土地の漁民が現に自覚している語源意識や現象との指示的意味関係に関するだけ詳しい説明を手がかりにして、客観的な命名基準を確定する必要がある。さらには、語彙素の新旧関係や品位、使用年層・使用頻度などの情報を手がかりとする必要がある。その際、重要なことは、弁別基準の価値づけという問題である。意味体系を支える複数の弁別基準は、すべてが等価値のものではなく、最も優位の弁別基準とそうでないものに見分けることができる。弁別基準の価値化は、次の二つの原則によって行うことが可能である。

(1) 語彙量の原則……その意味分野のすべての語彙素に関わる弁別基準で、しかも、語彙素の全体における位置を決定するものを最も重視する。

(2) レベルの原則……複数の弁別基準が認められる場合、語彙素と語彙素との意味的關係を、より上位のレベルにおいて決定する基準^{準則}を重視する。

この原則によって、「方位」(東)という弁別基準が、最も重要な弁別基準ということになる。しかし、この基準は、「東風」を示す語彙のまとまりに限定すると、すべての語彙素に共通して認められるものであって、弁別基準としては機能しえない。そこで、他に弁別基準を求めてみると、土地の漁民の現象としての風に関する説明や、風と実際の操業との関係についての説明、さらには語源意識などに基づいて、「季節」「漁獲物」「時間帯」「地面との関係」「風の強さ」「方位の広さ」といった命名基準を、語形との対応関係に即して帰納することができる。ところで、先に示した一二語の中には、「ヒガシカジェ」「コチカジェ」のように、「方位」という命名基準しか認められないものが存する。したがって、「方位」という命名基準を、弁別的機能をはたしえないという理由によって、単純に除去することはできないことになる。

そこで、先に示した一二語を命名基準に即して整理してみると、大きくは、単一の命名基準から成るものと、複数の命名基準から成るものとに分けられ、さらに、その下位にさまざまなパターンが認められる。

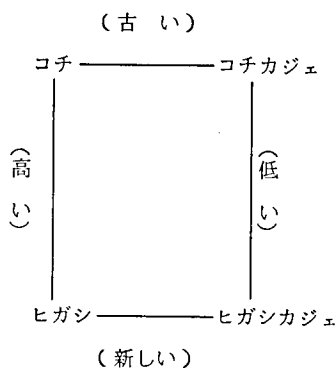
1. 単一の命名基準から成るもの (命名基準による弁別)
 - ①「方位」のみ ヒガシカジェ・ヒガシ・コチカジェ・コチ
2. 複数の命名基準から成るもの (レベル1)(レベル2)(レベル3)
 - ①「方位」+「φ」+「方位の広さ」—— ヒガシケ・コチケ
 - ②「方位」+「季節」—— ハルゴチ
 - ③「方位」+「漁獲物」—— アイノカジェ
 - ④「方位」+「漁獲物」+「方位の広さ」—— アイケ
 - ⑤「方位」+「漁獲物」+「時間帯」—— ヨアイ
 - ⑥「方位」+「漁獲物」+「地面との関係」—— ジアイ
 - ⑦「方位」+「漁獲物」+「風の強さ」—— オーアイ

〈知的〉 〈生活の必要性に基づく分化、新生〉

右の複数の命名基準の複合体において、レベル1・レベル2・レベル3のそれぞれに属するものが見分けられる。レベル2とレベル3とは、そのレベルの命名基準が別の命名基準を前提とするかしないか、言いかえると、命名基準の分化の前提として、別の命名基準を必要とするかしないかによって決定される。先に述べたレベルの原則とは、レベル2のものよりもレベル1のものを、レベル3のものよりもレベル2のものを、命名基準(弁別基準としての機能も担う)として、より重視するということである。

このような個々の命名基準の価値化に基づく階層化を試みたのは、次のような理由による。命名基準の階層化を試みることによって、東風を指示する一二語が、どのような順序で生成されたかという内部構造の解析が可能となるだけでなく、語彙体系の論理のもつ柔軟さ（非一意性）をも明らかにすることができるのではなからうかと考えたからである。土地の漁民が、どのような順序でことばを生成、造語し、どのような観点から多角的に現象を捉え分けているかを、この階層化によって、具体的に説明することが可能になると思う。

ところで、単一の命名基準から成る「コチ」「コチカジェ」「ヒガシ」「ヒガシカジェ」の四語は、命名基準だけでは、これらが併存している理由を説明することができない。したがって、命名基準とは別の弁別基準を求めなければならないことになる。それは、語彙素の新古の別であり、使用頻度の別である。これによって、四語の関係を示すと、次のようになる。



以上で、一二語が、実際の漁業生活において併用されている客観的理由をほぼ明らかにすることができたと考えるが、これ以外に、実は、漁業生活に即応した、次のような語彙素の使い分けの事実が存する。それは、一二語を、東風が吹く季節の違いによって使い分けるといふ事実である。

1. ヒガシカジェ・ヒガシ・ヒガシケ——春を中心として一年中。
2. コチ・コチカジェ・コチケ——初春から晩春。
3. ハルゴチ——中春から晩春。

4. アイノカジェ・ジアイ・ヨアイ・アイケ——晩春から初秋。

5. オアイ——晩夏から晩秋。

これは、文字どおり、漁業生活を基盤として生み出されたものと考えられる。「ヒガシカジェ」が吹き始めると、魚が少しずつ浜近くに来て来て、魚が出来るようになる。こうして、漁民は、春が来たことを知る。中春になって、「ハルゴチ」が吹き始めると、魚が群れをなして浜近くに寄って来るようになる。これを持って、本格的な地引網漁が開始される。そして、「アイノカジェ」が吹く晩春から初秋にかけて、魚の群れは、次第に大きくなり、地引網漁はいよいよ盛んになるわけである。このように、風が吹く時季によって一二語が使い分けられているのは、操業や漁獲にとって重要な時季を明確に認識するためであることが理解される。

以上の分析によって、東風を指示する一二語の語彙体系は、結局、次の三つのカテゴリーによって形成されていると考えることができる。

1. 命名基準による弁別
2. 生業的弁別

3. 位相的弁別

このうち、生業的弁別が、生活の必要性に基づいて成立したものであることは言うまでもないが、命名基準による弁別にも、もちろん、漁業生活の実際的要請に基づく細分化が展開されている。命名基準のレベル1は、一応、知的レベルの弁別であると考えられることができるが、レベル2・3に属するものは、生活の必要性に基づく細分化であり、生成であると判断される。したがって、命名基準による弁別の階層構造は、知的レベルと生活レベルとの重層構造と解することができ⁽¹¹⁾る。

その具体的な例を、「アイノカジエ」に対する「オーアイ・ジアイ・オーアイ」の二次的語彙素の分化の過程に指摘することができる。

「アイノカジエ」は、漁にとって最も都合の風であるが、なかに、むしろ、害を及ぼす風になる場合がある。「ジアイ」は地面近くを吹くために海を荒らし、「オーアイ」は風の力が強いために、やはり海が荒れる。そのため、「ジアイ」や「オーアイ」が吹くときは、普通、漁を休む。漁にとって、一般に、プラスの効用をもたらす「アイノカジエ」のうち、マイナスの効用をもたらす特定の場合に限って語彙化を行い、人びとの、その現象に対する注意と認識を定着させるという事実が、ここに認められるのである。一方「オーアイ」は、夜半から強風になり、夜の時点では翌日の出漁は不可能のように思われるが、早朝にはその風がすっかりやんで、夜の間にも多くの魚介類や海藻を浜近くに寄せてくれているので、漁にとって最も都合の風になるのである。ここには、マイナスの効用からプラスの効用への質的転換が認められる。このように、漁にとって、プラスの効用とマイナスの効用との間で、質的転換の認められる場合に限

って語彙の細分化が展開されるという事実は、生活の必要性ということ抜きにしては、説明することのできない事実であると考えられる。

四 潮の語彙と漁業生活

ついで、広島県大崎下島久比方言の潮の語彙の構造分析を行うことにする。久比集落には、戦前は専業漁師が四人いたたのことであるが、戦後はわずか二人になってしまい、土地の人びとは、現在、愛媛県今治市からトラックで運ばれてくる冷凍魚を買い求めているという。戦前は、おもに手漕ぎの舟を用いて漁を行い、「ホコズキ」(銚突き漁、約六メートルの青竹の先に銚をとりつけ、それで舟の上から魚を突き刺して獲る漁法)、「エビアミ」(海老網漁)、「ジビキ」(地引網漁、後に人手不足のため、「フナビキ」に変わった。現在、久比には全く浜がないが、昔は狭い浜があったという)、「イッポンスリ」(主として鯛の一本釣り)などの漁を行っていた。戦後かなりたつてから、船がすべて動力船になったため、大きな網を用いて行う漁が可能となり、「サラナガセ」(鯖流し、鯖を獲るための流し網漁)、「サシアミ」(刺し網漁)などの網漁のほか、「タコツボ」(蛸壺漁)が、とくに盛んになった。当地の漁法、漁業規模、漁業技術は、潮の流れやその変化と、まだ、完全には分離していない(かなり強く規制されている)段階のもののように思われる。

さて、久比方言の潮の語彙の最も大きな枠組は、

1. シオガタ(潮方、潮流の方位)

2. シオイキ(潮行き、潮流の速度)

3. シオジュン（潮順、潮位・潮流の速度の変化）

の語によって示される三つである。そして、この三つの枠組を横切る形で、「シオガ エー」「シオガ ワリー」という評価に関わる分類原理が認められる。

1の「シオガタ」に属する基本的な語彙は、「ホンシオ」（本潮、島に平行に、西から東へ向かって流れる）、「サカマジオ」（逆真潮、「ホンシオ」の内側を東から西へ向かって流れる潮）、「ナカミチジオ」（中満ち潮、「ナカミチ」のときに流れる本潮）、「ヒヨリジオ」（干潮から満潮へ変るときに流れる本潮）、「タタエジオ」（満潮から干潮へ変るときに流れる逆真潮）の五語である。これらのうち、まず、

ホンシオ↕サカマジオ

の対立が、「ホン」対「サカ」の語形の対応と意味的対立関係によって帰納することができる。ただ、「サカマジオ」に「マ」が認められるので、これが、「ホンシオ」ともともとストレートに対立する語形であったかどうか疑問である。もし、「ホンシオ」とともに、「マシオ」という語形が用いられているならば、むしろ、

マシオ↕サカマジオ

という対立を想定することの方が合理的であると解される。しかしながら、今日、当該方言には、「マシオ」という語形は行われていない。ただ、瀬戸内海域をはじめとして、山陰や関東域にも、「マシオ」という語形が広く用いられているので、当該方面にも、かつては、「マシオ」という語形が行われていたものと考えられる。この「ホンシオ」↕「サカマジオ」の二項対立において、「ホンシオ」の方に重点が置かれることは言うまでもない。

ついで、「ヒヨリジオ」「タタエジオ」「ナカミチジオ」の三語は、いずれも、潮の干満（シオノミチヒ、シオジュンの一つ）と関係のある語である。そのことは、「ヒヨリ」（干潮）、「タタエ」（満潮）、「ナカミチ」（中満ち）という潮位の割合を表わす語を、前部形態素にとっていることによって明確である。これによって、「シオガタ」に属する語彙は、大きく、

- (1) 「シオジュン」と関係しないもの
- (2) 「シオジュン」と関係するもの

の二類に分類されることになる。「シオジュン」と関係するものを特立して語彙化を行っているのは、「ホンシオ」「サカマジオ」のそれぞれが、「ヒヨリ」「タタエ」「ナカミチ」の潮位の際に、それ以外の場合とは、かなり大きく「シオガタ」を変えて流れるからである。とくに、「タタエジオ」と「ナカミチジオ」は、ともに、「シオガタ」が急カーブを描いて沖へ流れ出すために、舟や網が沖合へ流されてしまうことが多く、漁にとって著しくマイナスの効用をもたらすものだという。したがって、「ホンシオ」「サカマジオ」の变化のうち、漁にとってマイナスの効用を及ぼすものにとくに注目して、語彙化を行っているものと考えられる。それでは、「ヒヨリジオ」「タタエジオ」「ナカミチジオ」の三語は、「ホンシオ」「サカマジオ」と、いかなる意味的關係を示すかという点、次のように図示することができるであろう。

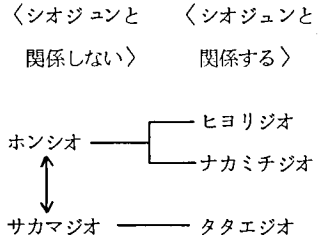


図 4

図4のうち、「ヒヨリジオ」は「シオガタガ エー」(潮方が良
い)、「ナカミチジオ」「タタエジオ」は「シオガタガ ワリー」
(潮方が悪い)という句と、それぞれ、意味的共起関係を結ぶ。「シ
オガタガ エー」は漁がしやすく、「シオガタガ ワリー」は、漁
がしにくいのである。

以上の分析結果を統合し、五語の間に認められる意味的關係を、
体系図として示すと、図5のようになる。

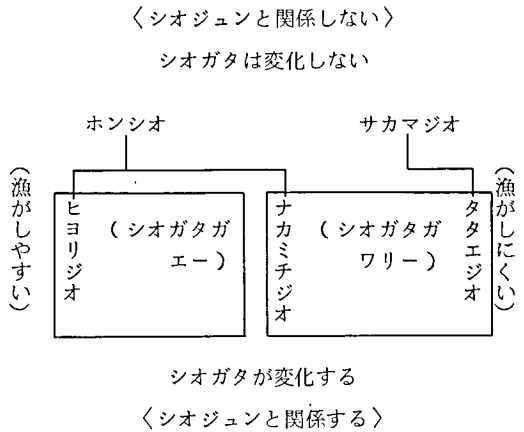


図 5

この体系図は、土地の漁民が、「ニゴービカラ ナカミチマデガ
リョーノ コロヤイ」(二合干たときから半ばまで満ちたときま
でが漁に好都合の状態)と説明する一種の言いぐさで、完全に一致
する。それでは、なぜ、「ヒヨリジオ」を中心として、潮位の低い
状態を当地の漁民が漁にとってプラスであると捉えているかとい
うと、当地の漁法が、主として、銚突き漁と船引網漁を行っているか
らである。どちらも、潮位の低い方が漁がしやすいのである。右に
帰納した「シオガタ」の語彙体系は、「ホンシオ」↑↓「サカマジ
オ」の対立が基本的なものであって、どの漁業社会にも認められる

一般的、普遍的な事実である。それに対して、「ヒヨリジオ」↕「タ
 タエジオ」↕「ナカミチジオ」の三項対立は、漁業生活の必要性
 に基づいて生成された当該方言に個別的な土地の漁師に共有の体系
 であり、しかも、評価に関わるレベルのものである。前者を知的レ
 ベルの弁別と呼ぶならば、後者は、生活の必要性に基づいて細分化
 した生活レベルの弁別と呼ぶことができる。したがって、図5は、
 知的レベルの弁別と生活レベルの弁別との複合的統一体であると考
 えることができる。

次に、「シオイキ」の語彙体系の分析を行うことにする。「シオ
 イキ」に関する語彙は、「シオガタ」に関する語彙とは異なって、
 四種の品詞が認められる。動詞語彙として、「ウゴク」(潮が動き
 始める)、「キマル」(動きの速さが決まる)、「トール・ユキア
 シガツク」(かなりの速さで流れ出す)、「トース・ハヤスギル」
 (非常に速さで流れる)、「ヤオル・ユルム」(速い流れが緩くな
 る)、「トロム・ヨドム」(流れが非常に緩やかになってやがて止ま
 る)の○語が認められ、形容語彙として、「ハヤイ」(潮の流れ
 が速い)、「ヤオイ」(流れが緩やかだ)、「ユルイ・オソイ」(流
 れが遅い)、「ネバイ」(流れが非常に遅い)の五語の形容詞と、
 「ユーナ」(ヤオイ・ユルイ・オソイの流れの速さをすべて指示し
 える総称的な語詞である)の形容動詞が用いられている。また、名
 詞として、「カレシオ」(枯れ潮、流れが全く止まった状態の潮を
 言う)の一語が認められる。動詞語彙は、流れの速さによって六段
 階に区別されており、「ウゴク」→「キマル」を基準にして、次
 のような循環構造を成していると考えられる。

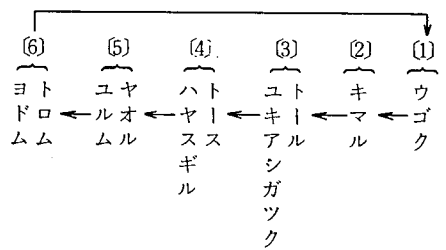


図 6

このように考えるのは、次のような理由による。「ウゴク」は
 「動き始める」という意味であり、「キマル」は「潮が動き始めて
 やがて流れの速さが一定する」という意味である。「ユキアシガツ
 ク」という動詞は、「ウゴク」「キマル」という動詞の意味を前提
 とすることによって、はじめて用いられるものである。したがって、
 「ウゴク」「キマル」「ユキアシガツク」の三語の間には、「ウゴ
 ク」→「キマル」→「ユキアシガツク」という段階的な意味連
 続が考えられるからである。この動きを、状態において捉えるとき、
 「ハヤスギル」の動詞と結びつくものとして「ハヤイ」が認められ、
 「ヤオル」に対して「ヤオイ」、 「ユルム」に対して「ヤオイ」及
 び「オソイ」が認められるわけである。これを、先の動詞語彙の体
 系に関係づけずと、次のようになる。

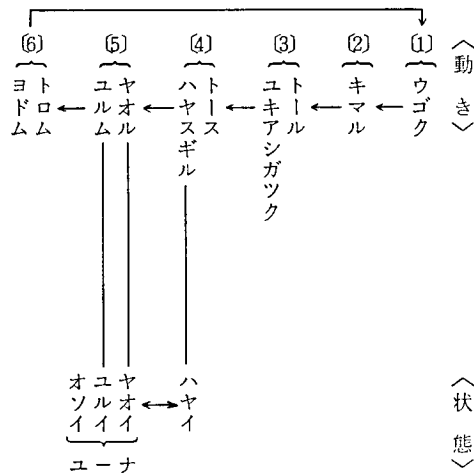


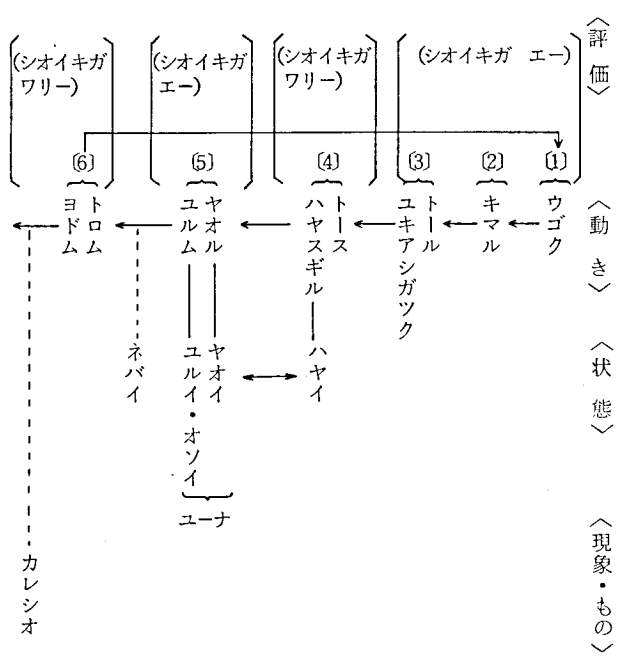
図 7

「ハヤイ」の直接の対義語は「オソイ」であるが、動詞との対応関係から考えると、「ユルム」「ヤオイ」の方がより基本的な要素であると判断される。また「ハヤイ」「オソイ」が潮流の状態をより客観的に捉えて表現するのに対して、「ヤオイ」「ユルム」は漁との関係から、より主體的に捉えており、流れて来る潮を船を基準として、一種の弛緩状態と見ていることが理解される。

ところで、これ以外に、形容詞に「ネバイ」、名詞に「カレシオ」という語が認められる。これに対応する動詞は、当該方言には行われていない。しかし、広島県大崎上島の沖浦集落（釣り漁を主体とする久比集落よりも規模の大きな漁業集落）の調査では、「ネバル」（「ユルム」と「トロム」との中間の段階）という動詞と「カレル」

（潮の流れが完全に停止する）という動詞を採録しているのか、かつては、当該方言においても、「ネバイ」と「カレシオ」に対応する動詞が行われていた可能性がある。

そして、当地の漁民は、①②③⑤の段階を、漁との関係から、「シオイキガ エー」と捉えているのである。この事実を、先に示した体系図に新たに位置づけて示すと、図8のようになる。



潮の流れの速さを、これだけ細分化して捉え分け、状態に関する同義語、類義語をこのように多く採えさせている事実は、文字どおり、生活の必要性に基づいてのことと考えなければならぬであろう。とくに、「シオイキガ エー」「シオイキガ ワリー」という評価に関わる弁別は、「シオ」を利用し、「シオ」に規制される漁業生活の中からしか生み出されえないものであると言ってよからう。こうして、「シオイキ」に関する語彙は、一応、

(1) 動きに関するレベル

(2) 状態に関するレベル

(3) 現象そのものに関するレベル

(4) 評価に関するレベル

の四つのカテゴリーから構成されていることが理解される。そして、(1)については6段階の循環的対応が、(2)については二段階の対応が、(3)については「カレシオ」の一語が、(4)については「エー」対「ワリー」の対立が、それぞれ認められる。

ところで、先に、一応と言ったのは、「動き」と「状態」は、結局のところ、一つのカテゴリーにまとめることができるのではないかと考えるからである。「キマル」「ヤオル」「ユルム」「トロム」「ヨドム」の五語は、すべて、状態性動詞であって、「ハイイ」「オソイ」「ヤオイ」「ユルイ」などの形容詞や「ユーナ」という形容動詞と、意味的にかなり近いと言ってよいものである。したがって、「状態」も「動き」の一つの場合と見なしていると理解することも可能である。このように考えることが許されるならば、「シオイキ」の語彙も、大きくは、三つのカテゴリーから成っているとする事ができる。

以上、広島県大崎下島久比方言の「シオガタ」の語彙と「シオイキ」の語彙について、体系分析を行った。その結果、「シオガタ」の語彙体系は、「方位」「シオジョンと関係するかしないか」「漁にとつての実際の効用(評価)」という三つのカテゴリーから成っており、「シオイキ」の語彙体系は、「動き」(「状態」も動きの一つの場合として捉えられている)「現象そのもの」「漁にとつての実際の効用」(「評価」という、やはり、三つのカテゴリーから成っていることが帰納できた。しかも、「シオガタ」の変化や「シオイキ」の動きの細分化は、すべて、「評価」ということが関わって展開しているという事実が認められるのである。生活の効用(プラスの効用・マイナスの効用)という言語外現実の要因に基づく語彙体系の細分化が、「シオガタ」「シオイキ」の二つの意味分野に共通して認められるわけである。

当地の漁法は、この二つの下位意味分野の体系的特色に基づいて判断するのに、「シオガタ」の変化と「シオイキ」の変化に強く規制されるものであったと考えることができる。それだからこそ、この部分について、体系が細分化し、語彙量が多くなっているのである。

五 語彙体系の変容と生活の変化

以上、鳥取県気高郡気高町姫路方言の風土語彙と広島県大崎下島久比方言の潮の語彙を中心として、生活語彙の微視的な体系分析を基礎に、土地の人びとが、みずからの生活に密接に関わる現象をいかなる視点から捉え、どのように分類しているかを見てきた。そして、その分類のカテゴリーが、知的な弁別と生活の必要性に基づいて生

成した弁別のそれぞれに、どのように対応しているかを考察した。

その結果、漁業に関する語彙は、知的レベルの分類を基礎として、その上に、生活レベルの分類が展開することによって、語彙体系が細分化するという重層構造を示しており、とくに、評価に関するカテゴリーが認められるという事実の重要性を指摘した。

このような構造を示す漁業語彙の体系も、今日、漁業が著しく近代化し、漁船や漁具が急速に改良されたために、大きく変容しようとしている。とくに、風位語彙は、漁船が完全に風の力を克服したことによって、各地で、急速に消えていきつつある。とくに、それは、漁業を継承しようとする若者の極端に少なくなっている小規模漁業社会において顕著である。それは、単に、若者が少ないということだけではなく、そのような漁業社会においては、若者が土地の漁業形態を改変することに急で、老年漁師の体験を、深刻に継承しようとする姿勢のきわめて乏しいことが、最大の原因となつてゐる。釣り漁や種々の網漁では魚が獲れなくなったために、沖合から磯のすぐ近くまで、大型の底曳き網漁船で漁を行うようになる。この現実を、これでは、小規模の沿岸漁業は衰滅すると。ただ単に否定するだけでは、もはやどうにもならない状態に立ち至つてゐる。また、各地で、養殖漁業が盛んになってきたため、潮や多くの漁場からかつて獲れた魚に対する関心が、きわめて乏しくなつてゐる。漁業語彙を構成する一々の語彙素の語源も、急速に忘れ去られようとしている。漁業語彙の調査研究は、農業語彙の調査研究と同様に、一刻の猶予も許されない状況にあることを痛感する。

(注)

1. 磯谷孝「言語学から文化記号論へ」(『文学と文化記号論』所収、

岩波現代選書23、一九七九・一)

2. 関本至「言語の学の基底にあるべきもの」(『方言研究年報』第18巻、一九七五・一二)

3. 国広哲弥「意義素の構造」(『言語』第七巻第二号、一九七八・一二)

4. 九鬼周造「いき」の構造」(岩波書店、一九六七)、井上忠司「世間体」の構造」(NHKブックス、一九七八・四)

5. Burling R., 1970, *Language in Its Cultural Context*, Holt, Rinehart and Winston.

6. 亀井孝ほか「日本語の歴史」6 (平凡社、一九六五)

7. 室山敏昭「漁業社会の波の語彙」(『国文学攷』78、一九七八・四)

8. 天野義広「福井県勝山市の『冬』の生活語彙——『雪』を中心として——」(一九七六・一〇)

9. あくまでも、土地の人びとの語源意識に基づいて解明することが必要である。他方言との比較、あるいは過去の文献の情報を、ここに単純に持ち込めば、共時論的操作の段階に、通時論的解釈を持ち込むことになるからである。

10. レベルの原則に関連して、「語形態の原則」を定立することが有効であろう。「語形態の原則」というのは、「第一次語彙素対第二次語彙素の対立に注目し、第一次語彙素に認められる命名基準の方を、第二次語彙素にしか認められない命名基準よりも重視する」という原則である。

11. 一地方言の風位語彙の、しかも東風を指示する語彙に限定して、微視的な分析を行ったが、ここで、漁業社会の風位語彙に関する

注目すべき普遍的な問題について、二・三指摘しておくことにする。

(1) 漁業社会の風位語彙の体系と語彙量は、その土地の漁業規模の大きさ、集落から漁場までの距離と相関的である。漁業規模が大きく、漁場が広ければ、風位語彙の体系と語彙量は複雑で多くなり、その逆の場合は単純で少なくなる。

(2) 漁業社会の風位語彙は、集落と漁場との位置関係を軸にして展開していると考えられる。

(3) 風位語彙においては、瀬戸内海域方言の全体がかなり強い一体性を示し、山陰方言も同様であるが、瀬戸内海域方言と山陰方言とは、相互に強い離反性を示す。

(一九八二・九・二三)